



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	田中義麿日記「未央手記」をめぐって（一）：日露戦争下における札幌農学校予修科の学生生活
Author(s)	山本, 美穂子; Yamamoto, Mihoko
Citation	北海道大学大学文書館年報, 17, 1-29
Issue Date	2022-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/85383
Type	departmental bulletin paper
File Information	1.pdf



< 研究ノート >

田中義麿日記「未央手記」をめぐって(一)

——日露戦争下における札幌農学校予修科の学生生活

山本 美穂子

はじめに

田中義麿(1884-1972年)は、1884年9月26日、長野県東筑摩郡片丘村(現 塩尻市)に生まれ、片丘尋常小学校尋常科(1891年4月入学、1895年3月卒業)、塩尻尋常高等小学校高等科(1895年4月入学、1897年3月2年修了)を修業後、1897年4月長野県尋常中学校(1899年4月長野県松本中学校に改称)に入学、成績優秀につき飛び級をし、1901年3月長野県松本中学校を首席で卒業、一年志願兵を経て、1903年9月札幌農学校予修科(修業年限2年)に入学した。1905年7月予修科を修了し、同年9月専門課程である本科(修業年限4年)に進んだ。田中義麿が本科在学中、札幌農学校は帝国大学に昇格し、1907年9月1日東北帝国大学農科大学が設置された。田中義麿は1907年9月11日付で農科大学の農学科2年級に編入され、八田三郎・須田金之助両教授に師事し、1909年7月6日に卒業した。卒業後は、農科大学で助手(1909-1911年)、助教授(1911-1921年)をつとめ、1913年には日本で初めて独立の科目として「遺伝学」の講義を行っている。その後、海外留学(1919-1922年)を経て、新設間もない九州帝国大学農学部に出向、養蚕学講座担任として後進を育成し、同大学を退職後は国立遺伝学研究所(1949-1956年)に籍を置き、蚕の遺伝学的研究の礎を築いた¹⁾。

田中義麿は1896年春から日記を綴っていた²⁾。日記は、①和紙に墨書きで摘録・清書した和綴じのもの、②ノートブック、③市販の日記帳(当用日記)と形態をかえ、欠落時期はあるものの、1972年までのものが現存している³⁾。それらの日記のうち、札幌に居住していた時期の1903~1916年にノートブックに書き綴った日記は、数冊ずつ製本されて「未央手記」と題した全5巻に仕立て直している(表1)。「未央手記」からは、旧校舎(北1条キャンパス)から新校舎(北8条キャンパス)への移転後の学生生活、日露戦争下での札幌農学校、東北帝国大学農科大学昇格後の教育・研究環境等が具体的にうかがえる。

この時期の学生日記は、田中義麿「未央手記」のほかには、①札幌農学校本科〔畜産学専攻〕を1906年に卒業した川嶋一郎の「当用日記」(1903~1904年筆、本科1~3年在学時)⁴⁾、②同校森林科を1904年に卒業した足助素一の「日記」(1904年筆、森林科3年在学時)⁵⁾が翻刻・刊行されているが、上記3名のものしか確認できていない。また、在籍している課程・専攻分野、交友関係とその範囲、傾倒している宗教・思想等によっても、日

記に取り上げた事柄・出来事を選択には個人差があり、感想・記述内容は各自の置かれている状況や関心の度合いによっても大きく異なる。

田中義麿は、恵迪寮史編纂委員会の求めに応じて、『恵迪寮史』（北海道国大学恵迪寮、1933年11月発行）に、「寮の命名当時」と題して、「未央手記」の記述に基づきながら、恵迪寮命名・寮歌・賄問題・記念祭・夜会・寄宿舎係など、恵迪寮の沿革史上で最重要な事項を回顧し、具体的に紹介した⁶⁾。しかし、札幌時代の回顧は『恵迪寮史』に寄せた文章以外には見当たらない。

田中義麿の「未央手記」は、大学史研究上において、学生生徒の学業史、とりわけ日常生活をとらえるという課題を前進させる資料と言える。なおかつ、「未央手記」は、動物遺伝学者の先駆者となった田中義麿が記したという点から、日本における動物遺伝学の歴史をたどる科学史・学術史資料でもある。この点から、札幌農学校が帝国大学に昇格した後の教育・研究環境をとらえるという課題を検討する上でも、重要な大学沿革資料と言える。

表1 田中義麿「未央手記」一覧（1903-1916年）

日記名	時期／収録日記名	所属
未央手記Ⅰ	1903年9月27日-1905年12月31日 六花篇(1903.9.27~1904.6.14)、流汗記(1904.6.15~1904.12.19)、自炊生活之巻(1904.12.20~1905.6.23)、征露二年日記(1905.6.24~1905.12.31)	札幌農学校予修科1年-2年、本科1年
未央手記Ⅱ	1907年1月1日-1909年4月19日	札幌農学校本科2年、東北帝国大学農科大学2年-3年
未央手記Ⅲ	1909年4月20日-1911年12月31日	東北帝国大学農科大学3年、助手、助教授
未央手記Ⅳ	1912年1月1日-1914年12月31日	東北帝国大学農科大学助教授
未央手記Ⅴ	1915年1月1日-1916年11月12日	東北帝国大学農科大学助教授

なお、田中義麿「未央手記」は、記述分量が大部で内容も詳細・多岐にわたるため、①札幌農学校予修科の在学時期（1903年9月～1905年8月）、②札幌農学校本科の在学時期（1905年9月～12月、1907年1月～8月）、③東北帝国大学農科大学の在学時期（1907年9月～1909年8月）、④東北帝国大学農科大学の在職時期（1909年9月～1916年11月）の4期にわけて、翻刻作業を計画して進めている。

そこで、本稿では、札幌農学校予修科への志願・出願期（1903年3月～7月）と在学時期（1903年9月～1905年8月）を対象として、同時期に田中義麿が綴った日記（「をたけび日記／明治三十五年十二月一全三十六年六月」田中義麿関係資料0488、「未央手記Ⅰ／自明治三十五年九月二十七日至同三十八年十二月三十一日」田中義麿関係資料0001）の翻刻作業を通じて見えてきた①学業（授業・受持教員・試験等）と、②日露戦争下の札幌農学校の様子に焦点をあて、1903～1905年の札幌農学校予修科生徒の学生生活を描出し、その背景を考察することとする。

1. 札幌農学校予修科の受験について

1-1. 札幌農学校予修科への入学志望 (1903年3月-5月)

長野県松本中学校を1901年3月に卒業した田中義麿は、同年12月に一年志願兵として近衛歩兵第二聯隊に入隊した⁷⁾。1902年12月満期退営、長野県東筑摩郡片丘村の実家に戻った田中義麿は、1903年3月3日東筑摩郡松本町(現 松本市)に赴いた際に札幌農学校学芸会編『札幌農学校』(裳華房発行)を買い求め、4月下旬からは午前(7:30~12:00)を読書と学課復習にあて、家業の養蚕業を手伝いながら進学に備えて過ごした⁸⁾。

『札幌農学校』は札幌の自然・風物などの地理的な美観、札幌農学校の校風・沿革・学生生活の現状などを紹介し、論説「札幌帝国大学設立の必要を論ず」をのせた格調高い文章の刊行物である。初版(1898年6月発行)の翌年には再版となり、1902年4月に増補第三版(1冊40円)が出版されるほど好評を博した。増補第三版では洋式建物が建ち並ぶ挿画「新築校舎予定図」と付録「札幌農学校入学の葉/自東京至札幌旅行案内」がついている。葉では、後述する『官報』広告欄の「生徒募集」情報をのせており、陸路・海路での旅行行程・交通費・割引情報など、入学志願者向けに有益な情報を発信した。同書に感銘を受けて札幌農学校入学を決意した者は少なくなく、札幌農学校のガイドブックのような役割を果たしていた⁹⁾。田中義麿が入手したのは葉が付録された増補第三版ではないかと推測される。

表2 札幌農学校予修科出願に至るまでの田中義麿の動向 (1903年3月-5月)

日付	動向・出来事
3月3日	札幌農学校学芸会編『札幌農学校』(裳華房発行)を長野県東筑摩郡松本町で買い求める
4月29日	札幌農学校より返書が届く
5月1日	夜、父に札幌農学校入学を相談する
5月5日	午後、札幌農学校入学願書・学業履歴書の作成に半日費やす
5月8日	札幌農学校入学願書・学業履歴書を書き改める
5月10日	長野県松本中学校より証明書が届く
5月11日	塩尻村に赴き、札幌農学校入学願書・入学手数料2円の為替券を封入した一通を投函する

[典拠] 田中義麿「をたけび日記/明治三十五年十二月一全三十六年六月」(田中義麿関係資料0488、北海道大学大学文書館所蔵)より作成。以下、「田中義麿関係資料」の所蔵先を略す。

1903年当時、札幌農学校は、尋常中学校卒業程度を入学資格とする課程として、「予修科」(修業年限2年)を付設していた。予修科修了者は専門課程の「本科」(修業年限4年)に進むことができ、本科卒業者は「農学士」を称することができた¹⁰⁾。全国的に中学校数の増加と共に高等学校入学が狭き門となっていたこともあり、予修科の生徒募集には全国各地の中学校から受験生が集まるようになっていた¹¹⁾。

田中義麿は、1903年4月29日に札幌農学校より「返書」を受け取っており、札幌農学校

宛てに入学手続を照会していたものと推察される。5月1日には「夜家父ニ数通ノ書面及規則書ヲ示シテ札幌農学校入学ノコトヲ相談ス」と、父親に同校への入学を相談した¹²⁾。進路相談の際に父親に示したものは、4月29日に札幌農学校から届いたものであろう。その中でも、「規則書」とは、「札幌農学校校則」の条文を印刷した、小形の薄い印刷物『札幌農学校々則』であったと考えられる¹³⁾。

1-2. 札幌農学校予修科への出願 (1903年5月)

1903年、札幌農学校予修科の生徒募集は9月11日から始業する第一学期に向けて、出願期限を6月10日とし、入学選抜試験を札幌農学校・文部省実業学務局（東京）・各府県庁を会場として7月1日に2科目〔数学（7：00～10：00）、漢文（10：00～12：00）〕、7月2日に2科目〔英語（7：00～10：00）、作文（10：00～12：00）〕で実施した¹⁴⁾。

札幌農学校は、1903年4月23日付『官報』13頁の広告欄に「生徒募集」記事を掲載した。出願時の提出物は①入学願書、②学業履歴書、③体格検査書、④写真、⑤入学手数料2円で、①入学願書には希望の試験地を明示するよう、指示があった。入学志願者資格は、中学校卒業者は予修科第1年級へ試験の上で入学を許可すること（第一項）、試験科目は国語漢文、数学、英語の3科目とすること（第二項）とした。さらに、第二項には「但し中学校長ヨリ優等生タル証明アル者ハ人員ヲ限り無試験入学ヲ許スコトアルヘシ」と但し書きがあり、出身中学校長より成績優等生の証明を受けた者に対しては「無試験入学」を許可することがあると明示した。

表3 札幌農学校予修科入学選抜実施日程 (1903年4月-7月)

日付	動向・出来事
4月23日	『官報』広告欄に「生徒募集」記事を掲載。予修科1年級募集人員40名
5月16日	田中義麿の出願書類一式を収受・受理
6月10日	出願期日
6月11日-19日	無試験入学許可者を銓衡
6月18日	文部省実業学務局での入学選抜試験監督として、須田金之助助教授に上京を命じる
6月20日	2府知事・29県知事宛てに入学選抜試験問題・実施要項・受験者名簿を送付
6月20日	入学選抜試験受験者宛てに試験時間割等の通知を送付
6月26日	「札幌農学校校則」の改正を文部大臣宛てに稟議
7月1日-2日	入学選抜試験を実施(試験会場:札幌農学校、文部省実業学務局、各府県庁)
7月4日	「札幌農学校校則」改正。校則第178条第二項を削除
7月17日	入学許可通知を送付

〔典拠〕札幌農学校教務部「生徒募集ニ関スル書類／明治三十五年ヨリ」（札幌農学校簿書0978）、札幌農学校教務部「予修科入学志願書／明治三十六年七月」（同0796-06）、「収受発送簿 乙／明治三十五年ヨリ三十六年」（同0769）、「札幌農学校公文録 第一冊 秘密書類 永久／明治三十六年」（同0774）より作成。札幌農学校簿書は北海道大学大学文書館所蔵公文書（以下、所蔵先を略す）。

田中義麿は、5月1日に札幌農学校への入学を父親に相談した後、同月5日・8日に「入学願書」・「学業履歴書」を書いている。5月10日には、出身校（長野県松本中学校）から「待ニ待タル証明書到着安堵ス」と、成績優等生の証明書類が届いて安堵している。翌11日には塩尻村に赴き、出願書類一式に入学手数料2円の為替券を添え、札幌農学校宛ての封書を投函した¹⁵⁾。

札幌農学校では、5月16日付で「予修科入学志願ノ件」として、田中義麿からの封書を収受、出願を受理した¹⁶⁾。札幌農学校教務部「予修科入学志願書／明治三十六年七月」（札幌農学校簿書0796-06）には、(1)「入学願書」（5月9日付、田中義麿筆）、(2)「学業履歴書」（同筆）、(3)長野県松本中学校からの成績優等生の証明書類〔①札幌農学校校長宛て「証明書」（5月9日付、長野県松本中学校長名・印）、②卒業試験成績表である印刷物「一学年間成績一覧表／自明治三十三年四月至明治三十四年三月／長野県松本中学校」〕が綴られている。田中義麿は「入学願書」に、希望の試験地は記さず、「七月一日ヨリ勤務演習ニ召集セラル、時ハ入学試験相受ケ難ク候ニ付履歴書ノ成蹟御考査ノ上無試験入学御許可相成度」と記して、無試験入学の希望を願い出た。

1-3. 「無試験入学」許可と「予修科規程」改正（1903年6月-7月）

1903年6月10日出願期日の予修科生徒募集には、募集人員40名（予修科毎級定員40名と同数）に対して、入学志願者は130名あった¹⁷⁾。札幌農学校は6月20日付で入学試験時間割を通知した¹⁸⁾。7月1日～2日の入学選抜試験実施後には、7月17日付で①選抜試験合格者38名、②無試験入学許可者5名（田中義麿、神彌十郎、辻中寿治、里正義、吉田清）の合計43名に入学許可通知を送付した¹⁹⁾。

無試験入学許可者の銓衡は、上記5名（田中義麿、神彌十郎、辻中寿治、里正義、吉田清）宛てには6月20日付で入学試験時間割を通知していないことから、6月11日～19日内で行われたと考えられる²⁰⁾。上記5名のうち3名（田中、辻中、吉田）は、出願時に無試験入学を願い出ている²¹⁾。

一方、札幌農学校は無試験入学許可者を銓衡した直後、「札幌農学校校則」（1896年6月23日制定）内の「予修科規程」（校則第175条～第184条、1898年5月追加）について、1903年6月26日付で札幌農学校長から文部大臣宛てに入学資格に関する条項の改正を稟請した。改正案は7月4日付で改正が認可となった²²⁾。中学校卒業者で学力優等成績抜群な者は予修科2年級に入学させることがありと規定した校則第178条の第二項「尋常中学校卒業生ニシテ学力優等成績抜群ナル者ハ特ニ予修科第二年級ニ入学セシメルコトアルヘシ」²³⁾が削除となったのである。これまで同項を適用した事例がないことが削除理由であった²⁴⁾。田中義麿も長野県松本中学校で首席であったにもかかわらず、予修科2年級には入学許可をされていない。中学校卒業者で学力優等成績抜群な者は「無試験入学」で予修科1年に入学許可することが通例となっていたと言える。

2. 札幌農学校予修科への入学と学業について—1903年9月～1905年7月

2-1. 札幌農学校予修科への入学

札幌農学校は北1条キャンパスの開校以来の建物が老朽化し、敷地も狭隘となったことから、北8条以北に広がる第一農場を用地として、南側敷地の一部分(北8条～北10条、西6丁目～西8丁目辺り)に新校舎の建設を1899年から始め、主な校舎が落成した1903年7月に移転した²⁵⁾。田中義麿の学生生活は、新校舎が建ち並ぶ北8条キャンパスで始まった。

札幌農学校の学年歴は9月11日始業、翌年7月10日終業として、3学期制(①9月11日～12月24日、②翌年1月8日～3月31日、③4月8日～7月10日)をとった²⁶⁾。休業日は、各学期の間を冬期・春期・夏期休業とし、祝祭日(天長節、紀元節、新嘗祭・神嘗祭・春季皇霊祭・秋季皇霊祭・孝明天皇祭・神武天皇祭)と、郷土行事の札幌神社祭日(6月15日)、毎年5月開催の学校運動会「遊戯会」も休業日とした²⁷⁾。各学期・学年末毎に試験を実施し、年2回卒業式(本科・予修科・森林科・土木工学科は7月、農芸科は3月)を挙行、課程修了者には「卒業証書」を授与した²⁸⁾。

(1) 始業式

田中義麿「未央手記I」にみる入学直後と学期始業の様子は、表4のとおりである。

札幌農学校の始業式は、例年、「演武場」(1878年新築)2階を会場に挙行されたが、キャンパス移転直後の1903年9月は「農業経済学及農政学教室」(1901年12月新築、通称：経済学教室)が会場となった。翌年からは、学年始めの9月の始業式は「雨天体操場」(1903年12月新築、通称：体操場)、学期始めの授業始業式は「農業経済学及農政学教室」や「農芸化学教室」(1902年12月新築、通称：化学教室)を会場として執り行われている。

始業式では、佐藤昌介校長による訓示の後、各部長(教務部長・生徒監部長・図書館長)を務める教授から教務上の訓示があった。田中義麿が予修科に入学した1903年9月11日挙行の始業式では、校長訓示がなかった。8月下旬から10月初旬まで、佐藤昌介校長は露清地方(シベリア、清国東北部)に農業及び通商事情視察と、札幌農学校基本林の経営参考に清国山西省の林業実況視察のため札幌を離れていたためである²⁹⁾。校長不在中は、教務部長の宮部金吾教授が校長代理を務めた³⁰⁾。田中義麿を含めた1903年9月の新入学生に対する校長訓示は、校長帰札後の10月22日に執り行われた。

始業式の閉会後は、学生生徒は所属する課程・級毎に指定の教室(教場)へ移動して、受持教員から教務上の訓示(授業・試験の諸注意、授業方法、前学期の試験結果等)を聞き、学期時間割を写した。

表4 始業式・新入生歓迎会一覧(1903年9月-1905年4月)

日付	式日名(会場)	式日内容
1903年9月11日	始業式(於:農業経済学教室)	諸教員より訓示
1903年9月30日	各科新入生歓迎会	当初予定は文武会総会(定員満たず取り消し)。開会の辞(南鷹次郎教授・生徒監部長)、歓迎の辞(東郷実)、在学生による演説(東郷実「札幌農学校ノ暗黒面ニ就キテ」、北澤小八郎「各科割拠ニ対スル意見」等)、饗応(菓子)
1903年10月10日	予修科新入生歓迎会(於:同窓会倶楽部)	開会・歓迎の辞(半澤虎太郎)、謝辞(田中義麿)、在学生による演説(森川孫蔵「農学校ノ現況」等)、饗応(菓子・寿司)、余興(壮士節、詩吟、追分節)
1903年10月22日	校長訓示	新入生に対する校長訓示
1904年1月8日	第2学期始業式(於:農業経済学教室)	校長訓示(白露開戦の暁に於ける吾々の覚悟について)、諸教員の訓示(寄宿舎、試験成績について) ※学生生徒の点呼をとる(式典日では初めて)
1904年4月8日	第3学期始業式(於:農芸化学教室)	受持教員(吉井豊造教授、新居敦二郎講師、青葉萬六教授、長嶺林三郎助教授、中島泰蔵講師)より授業上の訓示(授業方法、第2学期試験成績の概略等) ※試験点数・席次は不発表となる
1904年9月12日	始業式(於:雨天体操場)	校長訓示、原十大教授(図書館長)・南鷹次郎教授(生徒監部部长・教務部長代理)の訓示。式後、各受持教員より授業上の訓示
1905年1月9日	第2学期始業式(於:農芸化学教室)	各受持教員の訓示[宮部金吾教授から受験上の注意、大島金太郎教授(予修科主任)より第1学期試験成績の概略等]
1905年4月8日	第3学期始業式(於:農業経済学教室)	各部長(教務部長、生徒監部長、図書館長)の訓示。各受持教員より授業上の訓示

[典拠] 田中義麿「未央手記I」(田中義麿関係資料0001)より作成し、『<翻刻>札幌農学校第23期生川嶋一郎日記(1899~1904年)』(北海道大学大学図書館資料叢書3、2009年6月)より補完した。

(2) 新入生歓迎会

1903年9月中の田中義麿は、入学後30日以内に提出が必要な書類「在学証書」のため、在学中の身元保証人(札幌区に居住・家計をなし、家産を所有する20歳以上の男性)³¹⁾の確保に奔走している。長野県を同郷とする人的な伝手を頼りに、(株)北海道拓殖銀行取締役・小樽支店長の赤羽雄一(札幌農学校第8期生・本科1889年卒業)³²⁾の斡旋を受けて保証人(花村三千之助)を得た後、各科新入生歓迎会(9月30日)、予修科新入生歓迎会(10月10日、会場:札幌農学校同窓会本会事務所[北1条西1丁目2番地、通称:同窓会倶楽部])に出席した。新入生歓迎会では、在学生による演説が披露されている。特に、本科3年級(農業経済学専攻)の東郷実による演説は「札幌農学校ノ暗黒面ニ就キテ往時ト今時トヲ比較シ最痛快ヲ極メタリ」と田中義麿が感嘆しており、後に政治家となった東郷の雄弁さを物語っている。

2-2. 札幌農学校予修科における学科目と受持教員 (1903年9月~1905年7月)

(1) 札幌農学校予修科のカリキュラム

田中義麿が予修科に在籍した時期のカリキュラムは表5のとおりである。「本科ノ学科ヲ修ムルニ必要ナル普通学科ヲ授ク」(札幌農学校校則第175条)と規定された予修科の学科目は、①外国語(英語、ドイツ語)、②自然科学〔数学(代数・三角法・方程式論・解析幾何)、物理学、化学(有機・無機)〕、③人文科学(漢文)、④基礎技法(図学、測量)が通年2年で課された。外国語(特に英語)に重点がおかれ、次に自然科学(数学、化学、物理学)に授業時間数を多く課している。専門課程の本科に進む直前の予修科2年級では、⑤植物学(分類学・形態学)、⑥動物学、⑦鉱物学・地質学について、基礎的な授業が加わった。その他、2年間を通じて、⑧倫理(講話)、⑨体操(歩兵操典、兵式体操)の授業が課せられた。

表5 札幌農学校予修科学科目一覧(1903-1905年)

学科目	第1年級	主な内容	第2年級	主な内容
倫理		人倫道德ノ要旨		人倫道德ノ要旨
国語及漢文	4	講読、文法、作文	3	講読、文法、作文
英語	6	講読、翻訳、文法、作文	6	講読、翻訳、文法、作文
独乙語	3		4	講読、翻訳、文法、作文
歴史	2	近世史	—	
数学	4	代数、三角法	4	方程式論、解析幾何
測量	—		3	平面及高低測量、実測製図
動物学	—		2	普通動物学
植物学	—		2	顕花植物形態学及分類学
鉱物学及地質学	—		2	鉱物学及地質学
物理学	3	力学、物性論、音響学、熱学	2	光学、電気学、磁気学
化学	3	無機化学	3	有機化学
図学	4	自在学、用器画	—	
体操	3	兵式体操	3	兵式体操
計(時間数)	32		34	

[典拠] 札幌農学校校則第177条(『札幌農学校一覧 自明治三十六年至明治三十七年』1904年3月、45頁)より作成。

(2) 札幌農学校予修科の授業時間割

1903年9月~1905年8月に札幌農学校がカリキュラムをもとに編成した「授業時間割」は、札幌農学校の教務文書綴「教務ニ関スル書類」が当該期間では1簿冊(1903年)しか現存していないため、1904-1905年分が不詳である。田中義麿が予修科に在学した時期のものは、予修科1年級1学期(1903年9月-12月)の授業時間割しか現存が確認できない³³⁾。

1903年9月-12月の予修科1年級1学期の授業時間割は表6のとおりである。9月9日

に作成され、校長代理・教務部長（宮部金吾教授）の認可を受けている³⁴⁾。「数学」、「近世史」（歴史）、「体操」は、受持教員名の記載がない。学期始業前に受持教員を確保できなかったことがうかがわれる。

表6 予修科1年級1学期の授業時間割（1903年9月-12月）

	8:30~9:30	9:30~10:30	10:30~11:30	11:30~12:30	13:30~14:30
月	物理学 青葉教授	英語 大嶋教授	漢文 新居講師	独乙語 長嶺助教授	
火	近世史	物理学 青葉教授	独乙語 大嶋教授	数学	画法 飯田講師*
水	無機化学 吉井教授	独乙語—長嶺助教授 体操*	英語 ヒュエット	数学	画法(三時間)—飯田 講師 独乙語 大嶋教授*
木	独乙語 大嶋教授	漢文 新居講師	英語 ヒュエット	無機化学 吉井教授	体操 独乙語 長嶺助教授*
金	物理学 青葉教授	独乙語 長嶺助教授	漢文 新居講師	数学	
土	近世史	数学	英語 大嶋教授	無機化学 吉井教授	

〔典拠〕「第一学期授業時間割」（1903年9月9日付起案「授業時間割ノ件」、札幌農学校教務部「教務ニ関スル書類／明治三十六年」、札幌農学校簿書0984）より作成。授業時限の時間数は算用数字に改め、取り消し線は原文書のまま、*は原文書で朱筆変更された部分を表す。

田中義麿「未央手記Ⅰ」では受持教員の都合で休講する授業が目立ち、繰り上げて次の授業を実施することも多く見られる。教室設備（スチーム暖房）の不調による休講も、しばしばあった。授業が休講となった場合は、田中義麿は図書館（1902年12月新築）に行き、雑誌・新聞・図書を閲覧、授業の予習と復習、試験前の勉強をするなど、自習時間として過ごすことが多かった。

田中義麿は1903年9月30日新入生歓迎会の閉会後に図書館閲覧室の利用に必要な「閲覧票」の交付をうけ、10月5日から図書館閲覧室を利用している。「図書館規程施行細則」（1903年9月10日改正³⁵⁾によると、当時、図書館閲覧室の開室日は日曜日・祝日を除く月～土曜日で、開室時間は1～3学期（8:00～16:00）、夏期休業期間（8:00～12:00）であった。学生生徒の図書館利用は閲覧室での閲覧利用が基本であり、蔵書の「借受」は館長の認可を得て、原則として洋装図書2冊（和漢装本は10冊、逐次刊行物は製本10冊程度の分量に換算）までであった。受持教員の指定した教科書や参考書については、学生生徒の願出があれば、図書館に装備して学生生徒へ貸し付けた。田中義麿「未央手記Ⅰ」には、「先ニ注文シ置キタル「フィッシャー万国史」図書館ニ到着」（1904年1月26日の条）、「本日ヨリ歴史（Fisherノ万国史近世史）ノ講義始マル」（同月29日の条）とあり、フィッシャー『万国史』（George Park Fisher, *Outlines of universal history : designed as a text-book and for private reading.*）が予修科1年級2学期の「歴史」授業のテキストとして使われ、

図書館に備えられたことがうかがえる³⁶⁾。

(3) 札幌農学校予修科の履修学科目と受持教員 (1903年9月-1905年7月)

田中義麿が予修科で実際に履修した学科目と受持教員は表7のとおりである。

1903年9月当時、札幌農学校の専任職員は、定員数が校長1人・教授14人・助教授18人・書記8人であった³⁷⁾。現員数(同年11月末現在)は、校長1人・教授15人(内、校長1人含む)・助教授13人(内、書記1人兼任)・書記6人(内、助教授1人兼任)であり、助教授・書記は定員数より少ない。教授は、〔1〕本科の専攻分野(①農学・園芸学、②農業経済学・農政学、③植物病理学、④農芸化学、⑤応用動物学〔動物学・昆虫学・養蚕学〕、⑥畜産学・獣医学)を担当する者と、〔2〕森林科・土木工学科の専門分野(森林学、土木工学)を担当する者、〔3〕本科以外の付設課程(予修科・森林科・土木工学科・農芸科)の学科目を担当する者で構成された。助教授は、〔1〕本科担当の教授の後継者と、〔2〕農場実習・農芸科授業の担当者であった。書記は、〔1〕兼任のない書記は教務部・庶務課・会計課に所属し、〔2〕兼任のある2人は博物館・農場に所属して事務業務を担った³⁸⁾。予修科の学科目を主に担当した教授は、青葉萬六教授である。

青葉萬六は、1902年7月に東京帝国大学理科大学物理学科を卒業後まもなく、同年10月10日付で札幌農学校から物理学・数学の講師を嘱託されて、札幌に赴任した。翌年8月31日付で嘱託が解かれ、札幌農学校教授となった。札幌農学校では、当初から物理学・数学(微積分学)担当の教授を予定して、青葉を東京から招いたと考えられる³⁹⁾。

予修科の授業は、結局、①専任職員(本科の教授・助教授、森林科の教授)が外国語(英語、ドイツ語)と専門科目(動物学、植物学、化学、測量)を分担して受け持ち、専任職員が本務・他課程の授業等で受け持ちできない科目(漢文、数学、歴史、倫理)や、軍人が担当する科目(体操)については、②嘱託、③嘱託講師の2種別(身分)の方法で臨時に補充するほかなかった(表8)。

札幌農学校は、田中義麿の予修科在学中、「漢文」に新居敦二郎を、「数学」に西田辰三郎に、「歴史」・「倫理」に中島泰蔵を、「地理学」・「動物学」に八田三郎を「嘱託講師」として新たに雇用し、授業を受け持たせた。なお、八田三郎は、本科で動物学を担当していた原十太教授(1904年9月10日付転出)の後任者として学習院から招聘した人物のため、他の3名とは雇用理由・状況が異なる。八田三郎は、1904年10月6日付で嘱託講師として赴任し、翌年5月6日付には、当初の予定通り、札幌農学校教授となった⁴⁰⁾。

「体操」(兵式体操)については、1903年7月9日付で解嘱した吉田郡治(陸軍歩兵特務曹長)と轟木萬六(陸軍歩兵曹長)の後任として、木下和夫(陸軍歩兵特務曹長)を同日付で雇として採用し、「舎監部」(学務校務を所掌した部署)と教務部での勤務に従事させ、1学期が始まった後に9月28日付で「嘱託」として授業を受け持たせた⁴¹⁾。

また、「英語」の授業については、アメリカ出身のC. W.ヒュエットを1903年9月1日付で「嘱託」として新たに雇用した。札幌農学校では、A. A.ブリガム(Arthur Amber

表7 札幌農学校予修科履修学科目表(1903年9月-1905年7月)

学科目	時間	受持教員名	学科目	時間	受持教員名
1年級1学期(1903年9月-12月)			2年級1学期(1904年9月-12月)		
漢文	3	新居敦二郎講師	漢文	1	新居敦二郎講師
英語	4	ヒューエット、大島金太郎教授	英語	6	ヒューエット→宮部金吾教授、大島金太郎教授/中島泰蔵講師
独逸語	5	大島金太郎教授、長嶺林三郎助教	独逸語	4	大島金太郎教授→時任一彦助教/松村松年教授
数学	4	西田辰三郎講師	数学	4	西田辰三郎講師
物理学	3	青葉萬六教授	物理学	2	青葉萬六教授
無機化学	3	吉井豊造教授	有機化学	3	大島金太郎教授
画法	3	飯田雄太郎講師	動物学	2	八田三郎講師
歴史	—		植物学	2	宮部金吾教授
倫理	—		地質学	2	八田三郎講師
体操	1	木下和夫囑託	測量	2	高山節繁教授
1年級2学期(1904年1月-3月)			倫理		中島泰蔵講師
漢文	3	新居敦二郎講師	体操		
英語	5	ヒューエット、中島泰蔵講師	2年級2学期(1905年1月-3月)		
独逸語	4	大島金太郎教授	漢文	1	新居敦二郎助教
数学	4	西田辰三郎講師	英語	4	大島金太郎教授、宮部金吾教授
物理学	3	青葉萬六教授	独逸語	4	時任一彦助教
無機化学	3	吉井豊造教授	数学	4	西田辰三郎講師
図画	2	飯田雄太郎講師	物理学	2	青葉萬六教授
歴史	1		有機化学	3	大島金太郎教授
倫理	—	中島泰蔵講師	動物学	2	八田三郎教授
体操	1	木下和夫囑託	植物学	2	宮部金吾教授
1年級3学期(1904年4月-7月)			地質学	2	八田三郎教授
漢文	3	新居敦二郎講師	測量	2	高山節繁教授
英語		ヒューエット、中島泰蔵講師	倫理	—	佐藤昌介校長、中島泰蔵講師
独逸語	4	大島金太郎教授、長嶺林三郎助教	体操	—	
数学	4	西田辰三郎講師	2年級3学期(1905年4月-7月)		
物理学	3	青葉萬六教授	漢文	1	新居敦二郎助教
化学	3	吉井豊造教授	英語	5	宮部金吾教授、大島金太郎教授
歴史	2	中島泰蔵講師	独逸語	4	時任一彦講師
倫理	—	佐藤昌介校長、中島泰蔵講師	数学	4	西田辰三郎講師
体操		木下和夫囑託	物理学	2	青葉萬六教授
			有機化学	3	大島金太郎教授
			動物学	2	八田三郎教授
			植物学	2	宮部金吾教授
			地質学	2	八田三郎教授
			測量	2	高山節繁講師
			倫理	—	中島泰蔵講師
			体操	—	

[典拠] 札幌農学校成績資料(北海道大学大学文書館所蔵)より作成し、田中義磨「未央手記I」により補完した。「時間」欄は成績資料の記載の数字と空白で、成績資料に未記載の学科目は—を表示した。

Brigham) が1893年11月30日付で雇満期解雇となって以来、高額な人件費がかかる「外国人教師」を雇えなかった。C. W.ヒュエットの場合は、①札幌在住のキリスト教宣教師であり、②「英語」授業は週4時間程度、③給与は毎学期末毎に支給という、非常勤の雇用形態をとっており、本科の専門講義「農学」の担当として米国から招聘して常勤であったA. A.ブリガムとは雇用目的・条件が全く異なる⁴²⁾。C. W.ヒュエットの授業では、英会話のほかに、Dictation (書き取り)、Reading (読解)、Translation (翻訳) 等が行われたことが、田中義麿「未央手記 I」に記述されている⁴³⁾。

表8 予修科授業の嘱託講師・嘱託教員一覧 (1903年9月-1905年7月)

氏名	授業	身分(転任先)	学歴、学位、前歴等 〔現職〕
		嘱託期間	
飯田雄太郎	画学	講師	東京電信学校(1888年卒業)、 北海道尋常師範学校助教諭
		1898.9.13. ~ 1904.2.29.	
新居敦二郎	漢学	講師	徳島中学校長、北海道庁属、貴族院雇、大蔵省臨時秩禄処分局属
		1903.9.1. ~ 1904.12.19. (札幌農学校書記兼助教授)	
チャーレス・ウェスレー・ヒュエット Charles Wesley Huett	英語	嘱託	B. A. (デンバー大学) 〔宣教師/札幌美以教会〕
		1903.9.1. ~ 1905.3.9. (帰国)	
西田辰三郎	数学	講師	京都帝国大学理工科大学土木工学科(1903年2月卒業)
		1903.9.25. ~ 1907.8.31. (東北帝国大学農科大学土木工学科教授)	
木下和夫	体操	嘱託	陸軍教導団歩兵科(1891年卒業)、陸軍歩兵特務曹長(補充兵第二十七聯隊付/第七師団) 〔雇〕
		1903.9.28. ~ 1904.8.5.	
中島泰蔵	英語、倫理	講師	大阪英語学校高等科(1890年卒業)、Ph.D. (コロラド大学)、授業嘱託(学習院)、嘱託講師(慶應義塾・早稲田大学)
		1904.1.6. ~ 1906.2.28.	
八田三郎	動物学、地質学	講師	帝国大学理科大学撰科(1892年修了)、学習院教授
		1904.10.6. ~ 1905.5.6. (札幌農学校教授)	

〔典拠〕「退職者履歴資料」(北海道大学大学文書館所蔵)、前掲「札幌農学校公文録 第一冊 秘密書類 永久/明治三十六年」、「札幌農学校公文録 第一冊 秘密文書 永久/明治三十八年」(札幌農学校簿書0810)より作成。『日本キリスト教歴史大事典』(教文館、1988年)を参照。

(4) 札幌農学校予修科授業に対する感想と受持教員への評価

田中義麿「未央手記 I」では、本科の教授・助教授が受け持つ授業に対しては概ね満足している記述が見られる。外国語(英語、ドイツ語)の授業では、札幌農学校第2期生(1881年卒業)で英語が非常に堪能な宮部金吾教授(1886-1889年米国留学、D. S.)を筆頭に、

本務の研究領域で常に洋書を用い、海外留学から帰国後間もない大島金太郎（1898-1901年米・独国留学）、松村松年（1899-1902年独国・奥太利留学）、時任一彦（1901-1904年独国留学）が文法・読本の講義をした⁴⁴⁾。「松村教授ノ活発ナル宮部教授ノ温厚ニシテ深遠ナル皆一種ノ満足ヲ予ノ心ニ与ヘヌ」（1904年9月27日の条）と、学識のある本科教授たちを田中義麿は敬慕している。

「英語」は予修科授業で最多の時間数が課された科目であったが、授業の成果は生徒・教員が期待するよりも芳しくなかった模様である。田中義麿は、1904年5月6日開催の文武会⁴⁵⁾学芸部第一回演説会例会（於：経済学教室）で、本科学生の逢坂信忌による演説「サーターナー リサタス」を聞いた。翌日に、早速、農学校図書館でT.カーライル『衣裳哲学』（T. Carlyle, *Sartor Resartus*）とJ.ミルトン『失樂園』（J. Milton, *Paradise Lost*）の原書を閲覧したが、「何レモ難解ノ書 殆手ヲツケム術モナシ」と難解な原書に意気消沈した。翌年2月5日には、佐藤昌介校長宅を同級生と訪問した際に、佐藤校長が「頻ニ現在ノ学生及生徒ガ實際的英語力ノ幼稚ナルヲ嘆ジ早晚英語教授上ニ一大改革ヲ加フベキ考ナリ」と、学生・生徒の「實際的英語力」を嘆き、英語の教授方法を改革する考えがあると語った。

また、八田三郎教授が担当した「地質学」では、1905年5月26日～27日の1泊2日で、岩見沢・三笠地方に「地質学修学旅行」を実施している。札幌農学校では、植物学・地質学・動物学等などの実地研究のため、学生生徒を北海道内各地に派遣し、「修学旅行」と呼んでいた。教員が引率する旅行と、夏期休業等を用いた学生生徒だけの旅行の2種類があった。学科目授業の一環で八田教授が引率した「地質学修学旅行」は前者にあたる。この旅行では、日中は幾春別川上流でのアンモナイトや貝類の化石拾い、流域の地層観察、幾春別炭鉱の坑内見物などを行っている。宿泊先は炭鉱会社宿舎で、夜には八田教授を囲んだ談話を楽しみ、汽車移動の途中では江別名物の田舎饅頭、野幌の煉瓦餅などのお土産まで購入、「未央手記Ⅰ」も充実感があふれている。田中義麿は6月29日～7月1日に「地質学旅行報告文」を書き上げ、同月3日に清書して八田教授へ提出した。

一方、授業の方法・内容や生徒に対する接し方等について、予修科生徒が不満を抱き、不穏な空気が流れて、ほぼ同時に騒動となった授業がある。青葉萬六教授による「物理学」と、中島泰蔵講師による「倫理」である。騒動の概略は本稿3章に記すこととする。

(5) 札幌農学校予修科の学期末試験と学期末成績

試験は学期末毎に行われ、及第点（100点満点中60点以上）に達しない場合は追試験が課された⁴⁶⁾。田中義麿が受けた予修科学期末試験の実施日は表9のとおりである。田中義麿にとって初めての学期末試験（1903年12月14日～12月19日実施）は、傾向と対策に苦慮している。例えば、ヒュエットの「英語」試験では、試験当日の朝に、「英語ノ試験ニ short story モヤ当ランカト朝英文新誌ノ “Absent-Mindness of Emerson” ヲ暗誦ス」（12月18日の条）と R. W.エマーソンの作品に山を掛けている⁴⁷⁾。しかし、実際の試験では、「英

語ヒュエツト氏ノ試験“correct the errors”“略字”(A.M. B.C. M.A. &c.)ヲ与ヘテ其意味ヲ問フ「等二時間ニシテ終リ」とあり、見事に山がはずれた。

表9 予修科学期末試験日・卒業日一覧 (1903年9月-1905年7月)

期間・日付	試験名等	試験日内容・感想等
1903年12月14日～12月19日実施 (12月9日 試験時間割掲示)	第1学期試験	12/14独逸語(文法)・化学、12/15漢文・英訳(辞書使用可)、12/16独逸語・画法、12/17体操(不動の姿勢、転回、速歩)・数学(代数・三角法3時間)、12/18英語(略字の意味等2時間)、12/19物理学
1904年3月19日～3月26日実施 (3月14日 試験時間割掲示)	第2学期試験	3/22物理学(簡易)・独逸語文法(成績望みなし)、3/23化学(全問解けず)・体操(術科・学科)、3/24独逸語・英語、3/25歴史、3/26漢文(2時間、問題の半分も書けず)
1904年6月24日～6月30日実施	第3学期試験	6/24独逸語・物理学、6/25数学・英語、6/27独逸語・歴史、6/28化学、6/29英語、6/30漢文 ※田中義麿(応召につき不受験)
1904年9月14日～9月26日実施	第3学期追試験	※田中義麿(1年級3学期試験不受験につき予修科1年級に編入。9/14～9/26追試験受験。9/27予修科2年級授業に仮出席。9/28追試験合格判定、9/29より2年級授業出席を許可、10/6進級許可)
1904年12月14日～12月20日実施 (12月7日 試験時間割掲示)	第1学期試験	12/14独逸語・地質学、12/15有機化学・英語、12/16植物学・英語、12/17動物学・測量、12/19物理学・独逸語、12/20数学・漢文
1905年3月20日～3月27日実施 (3月11日 試験時間割掲示)	第2学期試験	3/20動物学、3/22物理学・独逸語、3/23地質学、3/24植物学・英文学、3/25測量、3/27漢文・有機化学
1905年6月19日～6月28日実施 (6月17日 試験時間割掲示)	第3学期試験	6/19数学、6/23動物学・英語、6/24植物学・英語、6/26測量・地理学、6/27独逸語・有機化学、6/28物理学・漢文
1905年7月3日発表	学年末評定	
1905年7月5日	卒業式	横山直也(特待生)、田中義麿(校費生)に選出

〔典拠〕田中義麿「未央手記Ⅰ」、「試験ニ関スル書類／明治三十七年ヨリ」(札幌農学校簿書0998)、1905年7月11日付『官報』37-39頁により作成。なお、日曜日は試験不実施。

学期末試験の成績は、各受持教員が評点後にとりまとめられ、「教官会議」(議長：校長、議員：教授・助教授)で審議した⁴⁸⁾。田中義麿「未央手記Ⅰ」には、「夕方学校へ試験ノ成績ヲ見ニ行ク 本日教官会議アリシ由ニテ成績表ノ今出デタルバカリナリ 予テ不結果ヲ覚悟セシ予ノ何事ゾ級ノ一位ニ居ラントハ」(1903年12月24日の条)とあり、教官会議後に「成績表」が掲示されて、学生生徒に周知されたことがわかる。

その後は、次学期の始業日に、受持教員が教務上の訓示のなかで、学期末試験の点数・

席次を改めて発表した。しかし、予修科1年級3学期の始業日では、「化学第一教室ニ集リ吉井、新居、青葉、長峯、中嶋諸先生ヨリ第三学期授業ノ方法及第二学期試験成績ノ概略ヲ聴ク(今回ヨリ点数及席順等ハ一切発表セザルトナレリ)」(1904年4月8日の条)となった。1904年4月8日以降、学期末試験の点数・席次の発表はなくなり、「成績ノ概略」を受持教員から伝えられるという形式に変わった。

1905年1月9日には、教務部の予修科主任である大島金太郎教授が予修科2年級生徒に対して「第一学期試験ノ成績ノ概略報告」を述べている。予修科2年級32名の第1学期試験の成績が「甚不結果」(甚だしく不成績)であり、「condition mark」(追試験対象の点数:60点未満、約して「condi.」)をとらなかった生徒はわずかに4名(里正義、赤崎平八郎、橘儀一、高橋喬)、「condition mark」を1~6個とった生徒の各人数を述べた。学科目中の成績では、最も不成績なものが「数学」、続いて「動物」、「化学」の成績が悪く、その一方で「condition mark」が一人もなかった学科目は「漢文」のみだと報告されている。

(6) 札幌農学校予修科の第3学期末試験と学年末成績

札幌農学校では、毎年6月下旬に3学期末試験を実施後、7月上旬の学年終業までに、学年末成績を算定し、教官会議を開催して、①進級・卒業の可否、②「校費生」・「特待生」の銓衡を行った。「校費生」は本科学生が対象で定員は12名、授業料免除、月額7円学資支給、寄宿舎への入舎義務があり、卒業後5年間の身分進退は校長の許可を要した。「特待生」は本科学生と全課程(予修科、土木工学科、森林科、農芸科)の生徒が対象で定員は15名、1学年間の授業料が免除となった。ただし、予修科生徒の「特待生」は定員を10名までとした⁴⁹⁾。

田中義麿は予修科1年級から学期末試験の成績が常によく、席次も首位であることが多かった⁵⁰⁾。予修科に入学直後、予修科1年級の級長・副級長は、「級中ノ与論ニヨリ出席簿ノ順序ヲ以テ横山直也、笠井幹夫ノ二君ヲ級長及副級長ト定ム」(1903年9月29日の条)と、「出席簿」の順序で決めた。しかし、翌年は、「級長及副級長ノ撰挙アリ予(長)及笠井君(副)」(1904年10月22日の条)とあり、「撰挙」によって選出する方法に変わり、予修科2年級の級長に田中、副級長に笠井が選ばれた。田中、笠井、横山は成績が常に上位で、普段の日常生活でも一緒に学び、遊ぶことが多く、仲の良い生徒たちであった。いずれも、級長・副級長に推されて相応しい成績を有し、交渉力・実行力もあり、同級生たちが頼れる人物であったと思われる。級長に選出された田中は、「万歳」と「声ヲ嗶ラシタル為今日逢フ人毎ニ奇妙ナル声ヲ出スモヲカシ」と、声をからすほど「万歳」を発して喜び祝ったようで、嬉しさが伝わってくる。

予修科2年級3学期末試験は、1905年6月19日~6月28日で実施された。進級・卒業の可否が判定される学年末成績の発表日は、とりわけ、最終学年である学生生徒にとっては、落ち着かなかった模様である。1905年は7月3日に掲示となった。当日、横山直也と一緒に登校した田中義麿は、「成績ノ発表ヲ待チシモ容易ニ掲示ノ模様モナシ仍ッテ一旦帰寓」

と掲示を待ちきれずに一端帰宅してしまう。家事を済ませて再度登校する途中で、「濱嶋、丸山二君ニ会フ曰ク「ウマクヤッタナ」と、長野県出身の友人（本科1年級濱嶋彦十、森林科2年級丸山敬悟）から祝いの言葉をかけられ、既に成績が掲示されたことを知る。「半信半疑掲示ヲ見ルニ及ンデ初メテ之ヲ確メタリ」と、自身の目で成績を確認し、予修科を首位で終えて本科に進むことが確定したことから、「感慨転々深ク心緒益々乱レテ麻ノ如シ」と終日感慨にひたった。

なお、田中義麿は、予修科卒業式（1905年7月5日）には出席していない。石狩湾に面した濱益村の漁港調査事務所で検潮・測量調査（夏期休業時のアルバイト）に従事するため、7月3日に成績を確認後、翌4日には離札していた。濱益村には9月2日まで滞在し、帰路は翌3日から石狩湾の海岸線を北上して、雄冬、増毛、留萌を徒歩で巡り、留萌から内陸部に入り、北竜、妹背牛を通過して6日に深川に到着、深川からは汽車で移動し、旭川第七師団官舎に宿泊、帰札したのは本科の学年始業式前日の9月10日であった。

3. 日露戦争下における札幌農学校について—1903年9月～1905年8月

田中義麿が予修科で過ごした時期は、日露戦争（1904年2月～1905年9月）の時期と重なる。「未央手記Ⅰ」には、学校においても、下校後においても、戦争の影が急速に、直接的かつ間接的に日常生活にあらわれることを読み取ることができる。以下、「未央手記Ⅰ」の記述を通じて、予修科生徒の目に映った、日露戦争下における札幌農学校の不穏な様子と学生生活への戦争の影響について、時系列にいくつか見ていくこととする。

(1) 文武会規則修正案の審議（1903年11月14日～1904年2月13日）

遊戯会（体育系団体）と学芸会（文系団体）が1901年9月21日合併して創設された「文武会」（会頭は佐藤昌介校長）は、田中義麿が予修科に入学した頃、「総会」に学生生徒が集まらず、出席定員が満たずに2回も流会（9月30日、11月7日）となった。

11月14日、「学校ニテハ二回流会ノ失態ヲ演ジタル」総会が開催され、佐藤昌介校長の講話後に、「本科ヨリ出デタル修正案並ニ予修科ノ出シタル改革案付説明及二三ノ質問アリ其ノ末議論ニ入ラザルニ時既ニ一時ヲ過グル」と、議論にならない内に2時間で閉会となった。その後、同月16日に総会が臨時に開かれ、佐藤校長が議長となり、総会前に下記の3カ条を学生生徒に約させ、日程も提示した。

1. 発言セントスルモノハ議長ノ許可ヲ受クルヲ要スル
2. 発言セントスルモノハ其姓名ヲ述ベテ許ヲ受クル
3. 採決ハ過半数ヲ以テスル

これにより協議がスムーズに進み、①文武会幹事会（本科学生）が提出した修正案と予修科生が提出した建議案は2案は特別委員に附托し、②審査期限を1週間以内とし、③特別委員が「文武会修正案」を起草すること、④修正案と建議案起草者以外の文武会会員か

ら1級2名まで特別委員を互選することに決した。「校長モア、見エテナカへ、抜ケ目ナキ先生ナリ」と、田中義麿は校長を評している。

田中は、上記の特別委員(規則修正案審査会委員)となって起草に関わったが、「文武会ヲ団体組織ニスベキカ否カ」が修正案(本科案)と建議案(予修科案)の最大の相違点であり、議論は平行線をたどった。本科学生と予修科生徒との間の軋轢を感じさせる本件は、2月2日には副会頭の吉井豊造教授・大島金太郎教授との協議で、修正案と建議案を同時に一時撤回し、「新規ノ腹案」を特別委員が起草することとなった。2月13日開催の臨時総会でこの「新規ノ腹案」が「多少ノ論議アリタルモ結局全部原案通ニ可決」となり、「文武会規則修正」の騒動は落ち着いた。「校長(会頭)ハ云フモ更ナリ 吉井、大嶋(副会頭)ニ先生喜色満面」と、教授たちの顔からその安堵を読み取っている。しかし、農学校校長・教授が苦心するほどの軋轢が、本科学生と予修科生徒の間に生じていたことがわかる。

(2) 「えるむ会」発会準備と頓挫(1903年11月23日～1904年1月23日)

11月23日夜、北海英語学校を会場にして、「本科予修科合同ノ会」を起こすための委員会が開催された。参集した学生生徒は18人、東郷実(本科3年級)が議長を務め、各級より1名まで起草委員を選ぶこととなり、田中義麿は推されて委員のひとりとなった。11月28日には、「本科予修科連合会組織委員会」を経済学教室にて開き、規則を協定し、会名を「えるむ会」と命名している。

しかし、翌年1月23日発会式挙行前に、予修科2年級が経済学教室で級会を開き、「本科学生トハ将来提携ノ見込ナシ」との理由で、「本日発会式ヲ挙グ可カリシ本科予修科会(エルム会)ニ全然反対スル」と発会反対を決議した。予修科2年級からの猛烈な反対を受け、「えるむ会」発会は頓挫した。発会式後に予定していた集会(会場:同窓会倶楽部)は、すでに準備を整えていたため、17:30より懇親会として開催し、余興(謡曲、鞍馬天狗、ハーモニカ、仮装、豊年踊など)をして集まった学生生徒をなぐさめた。理由は不明であるが、本科学生と予修科生徒(特に予修科2年級)との間に不穏な空気が漂っていたこと、学生生徒が何らかの団体組織(もしくは定期的な集会)を新たに作ろうとしていたことが読み取れる。

(3) 制服・制帽・靴・正規ボタン・襟章の着用と欠席届の提出(1903年12月3日)

1903年12月1日、予修科主任の大島金太郎教授より予修科生徒に下記の訓示があった。

1. 本月三日ヨリ昇校ノ際ニハ必ズ制服制帽及靴ヲ穿ツ
之ニ違フモノハ教室ニ入ラシメザル
2. 毛布、肩掛等ヲ被リテ昇校セザル
3. 制服ノぼたんハ直ニ制規ノモノニ改ムル
4. 以後制服ノ左襟ニ左ノ襟章ヲ用フル

予 P 本 A
森 F 土 C
農 S

5. 欠席セルトキハ必ず欠席届ヲ出ス

無届欠席数回ニ及ブトキハ相当ノ処分ヲナス

等ノ注意アリ

12月3日より登校の際は、①必ず制服・制帽・靴を着用すること、②制服・制帽・靴の着用がなければ教室には入れないこと、③毛布、肩掛等をかぶって登校しないこと、④制服のボタンを正規の物に改めること、⑤制服の左襟には各科指定(各科英語表記の頭文字)の徽章(襟章)をつけること、⑥欠席する時は必ず「欠席届」を出すこと、⑦無届欠席が数回に及ぶときは相当の処分を下すことなど、学生生徒の服装を厳しく律し、授業への出席を厳格化した。

全国から札幌農学校に集まった生徒には、冬季に入り、降雪による道路状態の悪化や室内外の寒さに不慣れな者も多かったであろう。普段の着慣れた和装で登校していた者が多かったのではないだろうか。翌2日、田中義麿は「多クノ古物店ヲ捜シタレドモ見当ラズ止ムヲ得ズズックノ靴ヲ購入シテ帰ル」と、盗まれた靴の詮索のため古物商を探したが見当たらず、やむを得ず、布製のズック靴を購入して下宿に帰っている。3日は、「本日ヨリ例ノ規則履行ニテ洋服ニ非レバ教場ニ入ラシメザルトナレリ」と、上記の服制が訓示通りに履行されている。

翌年11月18日、宮部金吾教授の引率で植物園を巡覧する際、田中義麿は「高足駄」を履いており、宮部教授から入園を禁じられた。友人から「引下駄」を借用して入園を許されたが、予修科生徒の日常の履き物は靴ではなかった模様である。

なお、「欠席届」については、後日、予修科生徒が青葉教授を糾弾する騒動の切掛となってしまう。

(4) 始業式における校長訓示と式日での点呼実施 (1904年1月8日)

新聞でも連日報道されていた日露間の緊張の高まりを反映して、1月8日始業式において、佐藤昌介校長は「日露開戦ノ暁ニ於ケル吾々ノ覚悟」を演説した。この日の始業式は学生生徒の点呼をとり、出席簿につけた。田中義麿は「先ヅ学生々徒ノ人員点呼アリ(式日ニ出席簿ヲツケルハ之ガ初メテ)」と、出席簿をつけることが授業だけに止まらず、式日までに及んだことに驚いている。

(5) 札幌農学校基督教青年会例会での分裂 (1904年1月12日)

1月12日、同級生(大久保敬、牧長美)と共に、田中義麿は札幌農学校基督教青年会例会(会場:札幌組合基督教会)に参加した。賛美歌・祈祷の後、牧が「青年会ヲ本科ト予修科ニ分裂スルヲ得策トスル」と演説、末光績(本科2年級)等が反論し、この案は撤回

された。

(6) 開戦間近を伝える新聞号外 (1904年2月5日)

『北海タイムス』が「愈々開戦に決す 日露両国ハ戦争に」と、『北鳴新報』が「本日午後五時海軍に動員下る」と号外を出して報じた。田中義麿は「未央手記I」に号外記事の内容を抜粋して書き留めている。「皆時局ノ切迫ヲ告グルモノ人心為ニ恟々タリ」と開戦の日が近いことを感じ、「殊ニ里君ハ深ク予ノ召集セラレンコトヲ憂ヒテ今尚平和ヲ祈ラル」と、田中義麿が動員召集されるのではないかと、同じ下宿にいる親友の里正義(同級生)が心配し、平和を祈っている。田中義麿は、1901年12月一年志願兵として近衛歩兵第二聯隊に入隊し、翌年12月には1日付で陸軍歩兵軍曹に任命されていた⁵¹⁾。「令アレバ起チテ行クベシ 令ナクバ座シテ学事ニ勉勵スベシ」と覚悟を決めているが、平静を保とうと努めている姿が浮かぶ。

(7) 農芸科生徒の動員召集・各種送別会 (1904年2月6日、2月7日、2月8日)

2月6日朝5時半、窓外から田中義麿を呼ぶ声がした。声の主は小林正視(同級生)で、田中に「君ノ許ニハ未動員令下ラズヤ」と、「名倉ノ友人桂少尉(農芸科生徒)今朝四時電報ニテ動員ヲ報ジ来リ非常ニ騒ギ居ル故君ノ許ハト思ヒテ来レルナリ」と伝えた。桂宗佐(農芸科1年級)に動員召集の電報があり、田中も召集されたのではないかと心配して駆けつけたのだという。田中は小林に感謝し、再び床に戻ったものの、動揺はおさえられず、「独床中ニ前後ヲ思ヒ廻ス中夜ハ漸ク明ケタリ」と起きていた。その後、小林宅に赴き、桂少尉の師団・召集日等の詳細を改めてきいた。自分もいつ動員召集されるやもしれず、「兎ニ角本日ハ在宅ヲ要スル日ト認メタルヲ以テ昇校ヲ見合セ書類ヲ片付ケ等ス」と、自主的に登校を見合わせ、覚悟をして召集に備えた。

11時学校から戻った里正義が「本日ハ凡ベテ休業ニテ送別会等ヲナス」と、農学校の授業がすべて休講となったこと、予修科1年級として、軍籍がある田中たちの送別会を開催することを田中に伝えた。信伊奈写真館(南1条西3丁目)に赴き同級生一同で撮影をした後、中島公園内の岡田花園を会場として送別会が開かれた。

この日、田中義麿は、13:40発の汽車で出発する近衛師団召集兵を見送りに、停車場に行っている。「流石ニ停車場ノ雑沓ハ夥シキモノニテ入場切符ハ売切レ多クノ見送人ハ柵外ニ佇立シテ徒ニ汽車ノ動クヲ眺メツ、アリキ勇ム人憂フル人喜ブ人歎ク人社会ノ状態ハ最著シク此ノ一幅ノ活画中ニ顕ハル」と、停車場の様子を描写している。

翌7日には、長野県出身者の親睦団体「信濃青年団」も、軍籍のある3名の団員〔田中義麿、金井俊英(農芸科2年級)等〕のために、送別会を信伊奈写真館で開いた。送別会には、団員として北澤小八郎・今村伊那吉(本科3年級)、色部米作(本科2年級)、行田又三郎(予修科2年級)、賛助団員として大島金太郎教授や信伊奈亮正が参加していた。余興には露国関東総督アレキシーフと従卒(金井)が登場する「露西亜魂」、陸軍特務曹

長（金井）と大勢の見送人が登場する「動員下令軍人出発」など、時事的な演題の茶番が催された。

翌8日は、「今日ハ月曜ナレド時節柄何時如何ナル命令アルヤモ測ラレズ由リテ何トカ進退判然スル迄当分ハ学校ヲ休ムコトニ定メヌ」と、田中義麿は、当分の間、登校を見合わせて、下宿で待機にすることにした。

(8) 津軽海峡の通行不能・提灯行列の差し止め (1904年2月11日～2月13日)

連日、田中義麿は戦況を伝える号外を見て一喜一憂している。2月11日には、旅順港での日本海軍の優勢と伝える記事に、「旅順港ノ海戦ニ於テ露国東洋艦隊全滅ノヲ報ゼルモノナリ 嗚呼全滅カ全滅カ 我ハ殆夢寢ノ中ニ在ルガ如ク尚其真ナリヤヲ疑フナリ」とその信憑性を疑った。翌12日は、「今夜催サルベキ提灯行列ノ提灯ヲ求メントテ打連レ外出ス」と、戦勝提灯行列を予定して友人たちと提灯を買いに外出したが、「校長ノ厳命ニヨリ」中止となったと途中で聞き落胆した。校長の命令は文部省からの訓示だという。

2月12日第一号の号外は、商船「奈古浦丸」が津軽海峡辺でロシア軍艦4隻に包囲されて2月11日に撃沈されたと報道した。「人心俄ニ色メキ立チ 殊ニ小樽ノ如キハ何時敵艦ノ襲来ヲ見ルヤモ測ラレズトノ杞憂ヨリ汽車ニテ家什家族ト共ニ札幌ニ移転シ来ルモノ数知レズ」、老幼婦人を乗せた人力車が停車場通に長列をなし、札幌市街の喧騒は激しくなっていた。「戦時ノ凄惨ヲ想像セシメヌ」と田中は記している。

上記の報道をうけ、札幌農学校では、校長名で文部次官宛てに「露国軍艦暴行ノ為ニ津軽海峡交通壯絶ニ至急ヲ要スルモノハ当分電信ニテ御申越ヲ乞フ」と電信し、津軽海峡を渡るのは危険なため、当分の間は文部省への連絡を電報で行いたいと願い出た⁵²⁾。

翌13日には、経済学教室に学生生徒を集め、「祝捷行列差止め」の事について、佐藤昌介校長の訓示があった。田中は「諄々トシテ校長ヨリ訓示」と良い印象を受けていない。

(9) 宣戦詔勅の捧読・文部大臣訓示・学生生徒への訓戒 (1904年2月18日)

札幌農学校では、2月18日、経済学教室を会場として、宣戦詔勅の捧読があった。「校長宣戦ノ詔勅ヲ捧読シ又文部大臣ノ訓示ヲ朗読シ学生々徒ニ訓戒スル所アリ 終リテ天皇陛下ノ万歳ヲ三唱シテ散会」と田中義麿は記している。

(10) 予修科生徒による青葉萬六教授の糾弾 (1904年2月22日～2月28日)

2月22日、田中義麿ら予修科1年級の「物理学」授業で、受持教員の青葉教授が出席簿をとり終えた後、欠席届から話が及び、「本校ノ不規律」を罵り、「東都ノ諸学校ニ比シ後ル、」と卑下し、「君等ァ身体こそ大きいが」頭は「まるで子供だ 大人として取扱ふ価値のないものだ」と生徒に暴言を吐いた。授業を開始するように発言した生徒に対して、顔色を変えて大声で「出給へ 授業を受くる必要はない」と怒鳴って退出させたことから、予修科生徒たちが「憤怒ノ情終ニ抑ヘ難キ」状態となり、青葉教授を糾弾する騒動に発展

した。

予修科1年級は級会を開き、かねてから不満をもっていた「英語」・「倫理」授業の中島泰蔵講師についても、青葉萬六教授の件とあわせて、今後の対策を協議し、交渉委員を選挙した。協議の結果、①青葉萬六教授の言動を校長へ申告する、②失言の謝罪を求めること、③中島講師の倫理は佐藤昌介校長か大島金太郎予修科主任の傍聴を請うことを決議した。

札幌農学校では、前年の1903年4月にも予修科生徒が同盟して、授業の受持教員2名を糾弾する騒動が起きていた。4月6日に予修科生徒が進龍男助教授(漢学)、高杉栄次郎講師(英文学)に対して辞職勧告書を出した。札幌農学校では、生徒から聴取した後、4月13日教官会議で生徒の停学処分を協議し、生徒が謹慎悔悟を認めたことから同月23日で停学解除とした。しかし、進助教授は4月30日付で辞職、高杉講師も6月16日付で転出した⁵³⁾。

再び同じ事態に陥らないよう、青葉教授の件は、教務部長の宮部金吾教授の人徳と説示により、2月中に収束させた。2月25日、田中義麿ら予修科1年級に面会した際の宮部教授について、田中は以下のように記している。その3日後の28日には、予修科1年級が青葉教授との懇親会として臨時級会を開催するまでに落ち着いた。

先生ハ例ノ温容ヲ以テ先ヅ予等ニ椅子ヲ興ヘラレタル後「今日青葉教授ノ来リタルヲ幸ヒ君等ノ級ヨリ申出デラレタル旨趣ヲ告ゲタルニ同氏ヲ涙ヲ流シテ“以後予修科一年級ガ形式ニモセヨ教場内ノ静肅ヲ保ツテ呉レルナラバ自分ハ必ず十分ナル熱心ヲ以テ教授ノ事ニ従ヒ必ズ効果ヲ顕シテ御覧ニ入レン”ト云フヲ誓ヒタリ就テハ君等ノ級ニテモ一層注意シテ感情ノ衝突ヲ避クル様ニセラレタシ」トテ外国ノ例ヲ引キ等シテ親切ニ説示セラレタリ予等モ意外ニ事ノ平和ニ落着シラスノ意志ノ十分貫徹シタルト宮部先生ノ人格ノ如何モ紳士(gentleman)ラシキトニ多分ノ満足ヲ以テ教室ニ帰リヌ

(11) 予修科・農芸科生徒への「倫理」の義務化(1904年2月27日)

2月27日、佐藤昌介校長は、中島泰蔵講師による「倫理」授業を参観した。「是嘗テ級中ノ意見トシテ中嶋講師ノ授業ヲ来観セラル、ヤウ願ヒ置キシニ由ルナリ」と、予修科生徒の要望を聞き入れた結果ではあったが、「今週ヨリ倫理ノ講話ニ予修科及農芸科ハ出席ノ義務アルモノトシ他ノ科ハ随意トスル旨定メラレタリ但予修科及農芸科ハ交互ニ出席ノ義務ヲ負フモノトス」と、「倫理」授業には予修科生徒と農芸科生徒とが交互に出席になければならないと命じられてしまった。「余儀ナク倫理ニ出席」した中島講師の講話は、「音調ニ抑揚ナク頓挫ナクノンベンダラリントシテ牛尿ノ如ク時間ノ長キヲ警フルニ物ナシ」と、音調に抑揚がなく、例えようがないほど長時間に感じられると田中義麿は憤懣した。

(12) 飯田雄太郎講師「画法」の休講 (1904年2月29日)

2月29日、飯田雄太郎講師による「画法」授業(月曜日午後2時間)が休講となった。「午後画法ノ時間昇校セシニ休業ナリトノ事ニヨリ図書館ニ至リテ勉強ス」と、田中義麿は29日当日に休講を知った。

飯田雄太郎が「露様の名を以てし警察も聞捨ならずと取調中」と『北鳴新報』が報じ、3月3日には「飯田雄太郎君免職になりしとか」と川嶋一郎(本科3年級)は耳にしている⁵⁴⁾。一方で、田中義麿は、「午後ノ画法モ講師欠勤ノ為休業」(3月7日の条)と、飯田講師は「欠勤」だと思っていた。飯田は2月29日付で解職となっていた。

4月23日、夕食後に植物園を散歩した際、田中義麿は、飯田雄太郎に遭遇した。講師を辞した後、看板や絵を描いて生計を立てているという飯田の近況を聞き、以下のように、「露探」(ロシアのスパイ)の嫌疑は「軽率ナル札幌人士」のせいだと憤り、近況を不憫に思っている。

夕食後植物園ニ散歩シテ前講師飯田雄太郎氏ノ夕暮ノ景色ヲ写生シツ、アルヲ見ル同氏ハ曩ニ軽率ナル札幌人士ノ為ニ忌ハシキ露探ノ嫌疑ヲ蒙リ其為自農学校及高等女学校ノ講師ヲ辞シテヨリ収入ノ道絶エシカバ日々丹青ヲ事トシ或ハ看板ノ画ヲ引受ケ等シテ生計ヲ立テ居ル由誰カ先生ノ為一掬ノ涙ナカラシヤ

(13) 席順は出席簿の順序に義務化・「札幌農学校ノ特色」消える (1904年2月29日)

2月29日、「本日ヨリ校長ノ命ナリトテ出席簿ノ順序ニ由リ席順ヲ定メラル」と、これまで授業を受ける際に教室の席は生徒が自由に決めていたところ、出席簿の順序で席に座るよう、校長の命令が下った。席順までも不自由になったことで閉塞感を感じ、「次第二細事ノ干渉厳シクナリ」、「吾札幌農学校ノ特色ノヤウとと跡方モナクナリユカムトゾ悲シキ」と、細事の干渉が厳しくなり、「札幌農学校ノ特色」が消えていくことを憂い悲しんだ。

3月9日朝には、旧校舎の解体工事が進行中の北1条キャンパス辺りを散歩し、「校舎ハ追々ニ打毀タレ今残レル三棟ノ中一棟ハハヤ屋根ヲ剥ギ初メラレ益々此ノ懐カシキ紀念物ノ面影ヲ失ヒ行クコソ歎カハシケレ」と、旧校舎3棟のうち1棟の屋根が剥ぎ取られはじめている様子を見て再び嘆いた。

(14) W. S. Clark 先生の Address を読む (1904年3月29日)

春期休業中の3月29日、田中義麿は『札幌農学校』(裳華房発行)を手に取り、「W. S. Clark 先生ノ Address ヲ読ム当年ノ面貌想ヒヤラレテイト懐カシ」と、W. S.クラークによる札幌農学校開校式の演説を読み直している。「農学校一覧ヲ読ム」ともあり、『札幌農学校一覧』も合わせて読んでいた。札幌農学校予修科を志願してから約1年が経ち、志願当時に郷里で読んだ『札幌農学校』を手を回顧にふけていた田中義麿は、「此ノ日何トナク人懐シキ思胸ニ満チテ堪ヘ難シ」と鬱々している。「朝地理学小品ヲ読ミ」(4月2日の

条)、「午後 Milk hall ニ半時間ヲ費シ帰りテ「札幌農学校」ノ地理学小品、等ヲ読ミ」(4月2日の条)、「朝地理学小品ヲ読ム」(4月3日の条)と、4月2日～4月3日にかけても『札幌農学校』を手にとっている。

(15) 「倫理」授業で出席簿を付け始める (1904年4月30日)

4月30日「倫理」授業は、中島泰蔵講師による講話「生存競争ニ於ケル品性ノ価値」であった。「本日ヨリ出席名簿ヲツクルトトナリシカバ余儀ナク出席セシモ誰一人ノ真面目ニ聴ク者モ無キゾ詮ナケレ」と、4月30日より「倫理」講話でも出席簿をつけることになった。授業内容・方法に改善が見られない「倫理」授業に出席を余儀なくされ、鬱憤がたまっている。

中島泰蔵講師の件は、「中嶋講師排斥運動」(10月5日の条)、「陳情書」(10月22日の条)など日記の記述が穏やかではなく、田中ら予修科生徒は根気強く「排斥運動」を続けていた。田中ら生徒に対し、教務部長の宮部金吾教授は「学校ニ於テモ相当ノ手段ヲ講ジツ、アレバ何レ予等ノ目的ノ達セラル、モ遠キニアラザルベキ」(1905年1月4日の条)と、農学校でも手段を講じていると述べてなくさめた。一方、佐藤昌介校長には、「職員一身ノ進退ニ関シテハ生徒ハ敢テ容喙セザルヲ可トス」(2月5日の条)と、生徒は職員人事に口を出さぬよう、注意を受けた。中島泰蔵講師の件は、佐藤昌介校長も、宮部金吾教授にも解決させることができず、中島講師が離札するに至り、1906年12月28日付で解嘱となった。

(16) 田中義麿に臨時召集 (1904年6月14日)

5月31日、軍籍がある田中義麿は、「於寄留地勤務演習応召願」を書いた。その後、6月7日に郷里の父より「直接聯隊区司令官ヨリ聴得タル」情報として、「勤務演習ヲ卒業期迄延期シ得ルノ旨アリ」と、勤務演習を在学期間中は猶予できる旨、連絡を受けた。「吾意大ニ動ク」と動揺した田中は、友人(里正義、横山直也)に相談、「里君及横山君ニ語りテ意見ヲ求メシニ皆同意勧告セラレラレバ茲ニ全ク決心ノ臍ヲ固メヌ」と、田中が召集されて出征することを危惧していた友人たちは「猶予願」を出すように勧めた。田中は6月9日に父宛に「猶予願」を出した。ところが、「猶予願」と入れ替わるように、6月14日7:40頃、実家から「十八ニチゴゴ四ジタカサキヘリンジセウシウ レイゼウハタイヘオクラル」(18日午後4時高崎へ臨時召集 令状は隊へ送らる)との電報を受け取り、臨時召集の身となった。6月14日午後、札幌停車場での見送りには、予修科1年級全員と同2年級の大半のほか、宮部教授、大島教授、吉井教授、佐藤昌介校長もプラットホームまで駆けつけた。佐藤校長は「シッカリヤツテ来イ」と田中を送り出した。6月18日高崎歩兵第十五聯隊補充大隊に入隊した田中は、6月に手術をしていたためか、医務室で不合格となり「即日帰郷」となった。6月～7月にかけて東京で通院加療し、郷里で8月を過ごした後、新学期の9月には札幌農学校に復学した。

(17) 軍隊見送のため授業休業 (1904年10月20日)

10月20日登校の途中、田中義麿は、川又忠純 (同級生) から「本日ハ軍隊見送ノ為学校ハ休業ナリ」と聞く。半信半疑で学校にいくと、「大方ハ休業ナリトテ帰宅シ出席者少数ノ為遂ニ休業トナリヌ」という状況で、授業は出席者が少ないために臨時に休業となった。陸軍第七師団 (旭川) が10月20日より輸送を開始、月寒歩兵第二十五聯隊野戦隊も20日～21日中に3回ずつ列車で大阪へ出発すると報じられていたために、勘違いをした学生生徒が多かったようだ。実際に、農学校が学生生徒に出した軍隊見送に関する掲示内容は「今朝四時三十分及六時三十分迄ニ停車場前建札ノ場所ニ参集スベキ旨」(10月21日の条)であり、翌21日の朝4:30と6:30に札幌停車場前の「建札ノ場所」に参集せよという指示であった。

札幌農学校では、「軍隊送迎規定」及び「内規」を1905年1月18日付で制定した。以下のとおり、軍隊出征の場合には職員・学生・生徒は全員必ず臨場しなければならないと定めた⁵⁵⁾。

軍隊送迎規定

- 一 軍隊出征ノ場合ニハ本校職員学生生徒一同必ス臨場スル事
- 一 凱旋ノ場合モ亦前條ニ同シ
- 一 傷病兵帰着及ヒ遺骨遺髪等到着ノ場合ニハ各科交番ヲ以テ臨場スル事

内規

- 一 傷病兵帰着及ヒ遺骨遺髪等到着ノ場合ニハ職員ハ校務ニ差支ナキ限り臨場スル事
- 一 遺骨遺髪等分配式挙行ノ場合ニハ教授ノ内ヨリ職員総代トシテ交番ヲ以テ式場ニ臨ム事
- 一 各科交番ヲ以テ出迎ノ場合ニハ其科主任ハ必ス臨場スル事

しかし、出征数の増加に伴い、「軍隊送迎規定」及び「内規」は同年5月10日付で改正された。以下のとおり、軍隊出征の場合には農学校学生生徒総代として各科交代で臨場すること (ただし、場合によっては学生生徒全員臨場することがある) に改められ、「交番」(交代制) となった⁵⁶⁾。

軍隊送迎規定

- 一 軍隊出征ノ場合ニハ本校学生々徒総代トシテ各科交番ヲ以テ臨場スル事
但場合ニヨリテハ学生々徒全体臨場スル事アルヘシ
- 一 軍人戦死者葬式ノ場合ニハ各科中一級宛交番ヲ以テ臨場スル事

内規

- 一 一科臨場ノ場合ニハ其主任及関係教官臨場ノ事
- 一 一級臨場ノ場合ニハ教授助教授ノ内一名臨場ノ事
- 一 遺骨分配式挙行ノ場合ハ教授ノ内一名臨場ノ事
- 一 帰還兵傷病兵及遺骨遺髪等到着ノ場合ニハ職員（判任以上）ノ内一名臨場ノ事
- 一 各科関係教官ヲ配当スル左ノ如シ

本科

宮部教授 南教授 吉井教授 橋本教授 松村教授 高岡教授 八田講師 時任講師

予修科

大島教授 青葉教授 新居助教授 西田講師

土木工学科

坂岡教授 古藤教授 高山教授 中島講師

林学科

新島教授 宍戸教授 半澤助教授 齋藤教員

農芸科

尾泉教授 田中助教授 鈴木助教授 長嶺助教授 東海林助教授 石川助教授 上田助教授

田中義麿は、「午前八時十五分停車場前札幌農学校席ニ於テ之ヲ迎ヘ全九時プラットホームニ於テ其発車ヲ送ル」（1904年11月29日の条、歩兵第二十五聯隊の見送り）、「十時二十分プラットホームノ東農学校標旗ノ下ニ於テ徐ニ出行ク汽車ヲ送リヌ」（同年12月31日の条、下士官200名・将校3名の見送り）、「遺骨（出征軍人）（将校以下七十九名ノ）出迎モ予修科ノ番ナリ」（1905年1月25日の条）、「本日午前十一時四十九分傷病兵到着 出迎ハ予修科ノ順番ナレバ三時間ノ植物学ハ遂ニ休ミトナリ」（同年3月7日の条）と日記に記している。当初は出征する軍隊の見送りであったが、1905年に入ると、傷病兵や遺骨の出迎えが多く見られるようになる。臨場した場所は、①札幌停車場前の広場に設置された農学校席、②札幌停車場中のプラットホーム東側の「農学校標旗」の下の2個所であった。「軍隊送迎規定」に基づき、学生生徒は、本科・予修科・農芸科・土木工学科・森林科の交代制で臨場している。軍隊送迎時間に授業があった場合は、その授業は休業となった。

むすびにかえて

1905年1月28日、札幌農学校にアメリカ・メソジスト監督教会宣教師のM. C.ハリス(M. C. Harris, 1846-1921)が来学し、農業経済学教室で演説を行った。当日の演説内容と出迎えた札幌農学校校長・教授たちの様子を、田中義麿は下記のとおりに「未央手記I」に記した。

札幌及農学校ノ過去及将来、米国ニ於ケル日本人、米人ノ日露戦争観等種々雑多ノ題目ニ就キテノ多クノ興味アル談話ニシテ其温乎タル風采感化力ニ富メル顔容ハ講演後佐藤校長ノ謝辞ニ曰ヘルガ如ク実ニ人ヲシテ春風裡ニ在ルノ思アラシメタリ

後校長ノ発声ニテハリス博士ノ万歳ヲ唱ヘ博士ハ佐藤、宮部、南諸氏ト握手シタル後 good bye ヲ高呼シ櫓馬車ニ投ジテ去ル

「札幌及農学校ノ過去及将来」を論じられるアメリカ人宣教師は、M. C.ハリスほどの適任者はいないであろう。札幌農学校が開校した翌年の1877年、農学校生徒15人が函館美以教会宣教師を務めていたM. C.ハリスから受洗した。翌年には生徒7人がM. C.ハリスから受洗している。佐藤昌介（札幌農学校第1期生、1880年卒業）も、宮部金吾教授（札幌農学校第2期生、1881年卒業）も、M. C.ハリスから受洗した生徒のひとりである。M. C.ハリスは「札幌及農学校ノ過去」にとって、農学校の歴史上、不可欠な人物であるとも言える。

当時、佐藤昌介校長は、予修科の「英語」授業を囑託できる人材を確保することに苦心していた。1906年には、佐藤校長はM. C.ハリスに英語を母語とする宣教師で適任と思われる人材の仲介を依頼している⁵⁷⁾。日本に居住している（札幌に在住している者か、札幌に赴任する予定の者）アメリカ人宣教師に、英語の授業を非常勤で囑託する方法が経済的な方策であった。このような、当時の札幌農学校の現況も、M. C.ハリスに伝わっていたと考えられる。田中義麿が愛読した札幌農学校学芸会編『札幌農学校』（裳華房発行）は、「札幌と学問」、「札幌農学校の過去」、「札幌農学校の現今」、「札幌帝国大学設立の必要を論ず」の四章構成であった。「札幌帝国大学」は、まさに、「札幌農学校ノ将来」の姿である。

日露戦争下、田中義麿は出征軍人に自身を重ねて、軍隊の見送り・出迎えには可能な限り馳せ参じ、停車場にいけない場合でも下宿近くの線路横から頭を下げる日々を過ごしていた。札幌農学校とゆかりの深いM. C.ハリスの演説は、閉塞感・憂鬱さを感じていた田中義麿にとって、「春風」に吹かれたような心地を与えた。

田中義麿は、1904年4月23日、札幌農学校に訪れた春を感じ取り、その情景を下記のように記している。

今日ハ殊ニ天気晴朗ニシテ十分ノ休憩中ノ庭ニ出ヅレバ小サク優シキあまなノ花庭モセニ咲乱レテ足ヲフムベキ所モナシ 試作地ノ畠ハ整地セラレテ既ニ種ヲ下シタルモアリ馬ヲ追ヒテ耕シツアルモアリ 西ノ山々隴ニ霞ミテ雲耶山耶ト疑ハル、ハ神威岬ニ近キ山脈ナリトゾ

現在でも、キバナノアマナは構内に群生している。馬耕は既に行われていないが、田中義麿が札幌農学校で感じた季節の情景には大きな変化は起きていない。稿を改めて、札幌農学校運動会の「遊戯会」や、藻岩山など近郊の山々への植物採集など、田中義麿が閉塞感・憂鬱さを吹き飛ばした、『札幌農学校』（裳華房発行）が謳う、農学校らしい出来事・経験を紹介したい。

〔注〕

- 1) 「田中義麿年譜」(田中義麿関係資料0458)、「退職者履歴資料 五 2 大正10」を参照。所蔵先はいずれも北海道大学大学文書館。以下、「田中義麿関係資料」、「退職者履歴資料」の所蔵先は略す。
- 2) 田中義麿「拾片録」(田中義麿関係資料0469)の序文に、1896年春より日記を書き始めたとある。「拾片録」は、1903年5月に「素より書散したる反古ども」を拾い集め、1896年3月～8月、10月～11月の記事を摘録し、序文をつけて和綴じにしたもの。
- 3) 田中義麿博士のご遺族である辛島由美子氏より、2017年9月、北海道大学大学文書館が博士の旧蔵資料を受贈した。大学文書館では、旧蔵資料を「田中義麿関係資料」として整理・保管し、在札時期の日記類の翻刻作業を進めている。作業は、海藤侑里子・杉山和香奈・小田島良が解説を進め、山本が注釈・解説修正等を行っている。なお、田中義麿「未央手記」は製本の際に、ノートブックの天・地・のど部分が裁断されたため、欠損した部分が少なくない。本稿での「未央手記Ⅰ」の引用にあたっては、欠損部分を文章前後より推定して補った。
- 4) 『<翻刻>札幌農学校第23期生川嶋一郎日記(1899～1904年)』(北海道大学大学文書館資料叢書3、2009年6月)は、「明治三十六年当用日記」・「明治三十七年当用日記」のほか、「恵庭登山略記」(1904年7月)、「東北遊記」(1902年7月)、「北海紀行」(1904年8月)の旅行記をあわせて翻刻、収録した。
- 5) 『足助素一集』(足助たつ発行、1931年、189-338頁)に翻刻、収録されている。
- 6) 恵迪寮寮史編纂委員会編『恵迪寮史』北海道帝国大学恵迪寮、1933年、回顧録64-75頁。
- 7) 前掲「田中義麿年譜」。
- 8) 田中義麿「をたけび日記／明治三十五年十二月一全三十六年六月」(田中義麿関係資料0488)。
- 9) 例えば、岩手県二戸郡福岡町出身の川嶋一郎(札幌農学校予修科1900年入学)は、東京遊学中に本郷で購入した古書『札幌農学校』に、「本書ハ私ニ札幌農学校入学ノ決心ヲ為サシメシ紀念ノ書冊テアル」と書き込みしている。
- 10) 「札幌農学校校則」(1896年6月23日制定)、『札幌農学校一覧 自明治三十六年至明治三十七年』、1904年3月、12-50頁。
- 11) 北海道大学編『北大百年史』通説、1982年、128-131頁。
- 12) 前掲「をたけび日記／明治三十五年十二月一全三十六年六月」。
- 13) 北海道大学大学文書館は、北海道大学附属図書館から、長く保管してきた札幌農学校の刊行物の備蓄分について、移管を受けている。その中には、厚みのある印刷物『札幌農学校一覧』のほかに、『札幌農学校々則』が多数残っている。
- 14) 1903年6月19日付起案・20日校長決裁「入学試験通知ノ件」、1903年6月18日付起案・20日校長決裁「試験問題送付ノ件」(札幌農学校教務部「生徒募集ニ関スル書類／明治三十五年ヨリ」札幌農学校簿書0978、北海道大学大学文書館所蔵)。以下、「札幌農学校簿書」の所蔵先を略す。
- 15) 前掲「をたけび日記／明治三十五年十二月一全三十六年六月」。
- 16) 札幌農学校「収受発送簿 乙／明治三十五年ヨリ三十六年」(札幌農学校簿書0769)、札幌農学校教務部「入学志願者名簿／明治三十六年四月」(札幌農学校簿書1014)。
- 17) 文部大臣宛て進達「札幌農学校学生々徒募集人員、入学志願者及卒業者学科別／明治三十六年九月三十日調」(1903年10月15日付起案・同日校長決裁「生徒ニ関スル表進達ノ件」)、教務部「教務ニ関スル書類／明治三十六年」(札幌農学校0984)。
- 18) 1903年6月19日付起案・20日校長決裁「入学試験通知ノ件」、前掲「生徒募集ニ関スル書類／明治三十五年ヨリ」。
- 19) 1903年7月16日付起案・17日校長決裁「選抜試験合格者入学許可ノ件」(前掲「生徒募集ニ関スル書類／明治三十五年ヨリ」)、前掲「収受発送簿 乙／明治三十五年ヨリ三十六年」。
- 20) 1903年6月19日付起案・20日校長決裁「入学試験通知ノ件」、前掲「生徒募集ニ関スル書類／明治三

十五年ヨリ」。

- 21) 札幌農学校教務部「予修科入学志願書／明治三十六年七月」(札幌農学校簿書0796-06)。
- 22) 「九六二 校則中改正の件許可」、北海道大学編『北大百年史』札幌農学校史料(二)、1981年、577-578頁。
- 23) 『札幌農学校一覧 自明治三十五年至明治三十六年』、1902年12月、57頁。
- 24) 「九六二 校則中改正の件許可」、前掲『北大百年史』札幌農学校史料(二)、577-578頁。
- 25) 北海道大学125年史編集室編『写真集北大125年』北海道大学、2001年、9頁。
- 26) 本科・予修科・森林科・土木工学科の課程は3学期制をとったが、農場実習を主とする農芸科は2学期制(①4月1日～11月30日、②12月1日～翌年3月31日)をとった(札幌農学校校則第10条、前掲『札幌農学校一覧 自明治三十六年至明治三十七年』、20頁)。
- 27) 「学年歴」(前掲『札幌農学校一覧 自明治三十六年至明治三十七年』、1-2頁)、田中義麿「未央手記 I」(田中義麿関係資料0001)。
- 28) 「進級及卒業規程」(札幌農学校校則第35条～第47条)、「土木工学科規程」(同則第158条)、「予修科規程」(同則第180条)、「森林科規程」(同則第190条)(前掲『札幌農学校一覧 自明治三十六年至明治三十七年』、25-27・42・46・49頁)。
- 29) 「八二 清国へ校長出張ニ関スル件」及び「九四 校長海外出張ノ件」(「札幌農学校公文録第一冊 秘密書類 永久／明治三十六年」札幌農学校簿書0774)、「本会記事」(『札幌農学校同窓会第十五回報告／明治三十七年四月』、1904年4月、7頁)。
- 30) 前掲「札幌農学校公文録第一冊 秘密書類 永久／明治三十六年」収録の原議書決裁欄を参照。
- 31) 札幌農学校校則第19条、前掲『札幌農学校一覧 自明治三十六年至明治三十七年』、22-23頁
- 32) 「会員ノ職業」、『札幌農学校同窓会第十四回報告／明治三十六年五月』、1903年5月、24頁。
- 33) 1903年9月9日付起案「授業時間割ノ件」、前掲「教務ニ関スル書類／明治三十六年」。
- 34) 同上。
- 35) 「図書館規程施行細則」(1903年9月10日改正)、前掲「教務ニ関スル書類／明治三十六年」。
- 36) フィッシャー『万国史』(George Park Fisher, *Outlines of universal history*)は、札幌農学校蔵書である「札幌農学校文庫」(北海道大学附属図書館所蔵)に1885年・1904年版、高岡熊雄(札幌農学校第13期生・1895年卒業)や星野勇三(同第19期生・1901年卒業)の旧蔵書に1892年版(前者は農学研究院図書室所蔵、後者は北海道大学大学文書館所蔵)がある。
- 37) 「文部省直轄諸学校職員定員令」(1902年3月27日勅令第九十九号)、1902年3月28日付『官報』号外14-15頁。
- 38) 「職員(明治三十六年十一月末現員)」、前掲『札幌農学校一覧 自明治三十六年至明治三十七年』、72-75頁。
- 39) 「退職者履歴資料一八 昭和12年」。なお、青葉萬六が担当した学科目は、予修科「物理学」と土木工学科「微積分大意」である(「試験ニ関スル書類／明治三十七年ヨリ」札幌農学校簿書0998)。
- 40) 原十太教授の後任選定について、佐藤昌介校長は箕作佳吉(東京帝国大学理科大学長)に依頼した。急遽渡米することになった箕作に代わり、飯島魁教授(同大学動物学第二講座担任)が奔走した(1904年8月26日付佐藤昌介宛て飯島魁書簡、「七〇 八田三郎囑託ニ関スル件」、「札幌農学校公文録第一冊 秘密書類 永久／明治三十七年」札幌農学校簿書0804)。
- 41) 「退職者履歴資料二 1 明治36～37」、「六一 兵式体操授業解囑ノ件」・「六二 木下和夫雇採用ノ件」(前掲「札幌農学校公文録第一冊 秘密書類 永久／明治三十六年」)。なお、「舎監部」(後に生徒監部に改称)は、寄宿舎の管理、学生生徒の衛生・体格検査・風紀・集会・賞罰など、学務上の校務を分掌した学内部署(札幌農学校処務規程第4条、前掲『札幌農学校一覧 自明治三十六年至明治三十七年』、67-68頁)。

- 42) 「八五 米国人講師嘱託ノ件」、「一〇二 米国人手当金支給ノ件」(前掲「札幌農学校公文録第一冊 秘密書類 永久/明治三十六年」)。『札幌農学校一覧』掲載の職員名簿でも C. W.ヒュエットは「外国人教師」欄に記載されているが、札幌農学校の初期～中期にかけて在籍した「外国人教師」とは意味が異なる。
- 43) C. W.ヒュエットが1905年3月9日に離札した後、アメリカン・ボード宣教師 G. M.ローランド (George M. Rowland) と S. C.バートレット (Samuel C. Bartlett) の2名が1905年12月28日付で英語授業を嘱託された。両名は1906年3月31日まで英語授業を嘱託された(「二 米国人講師嘱託ノ件」・「四二 米国人二名講師解嘱ノ件」、「札幌農学校公文録第一冊 秘密書類 永久/明治三十九年」札幌農学校簿書0813)。
- 44) 留学先・留学期間は拙稿「1898年「学位令」下における北大教官・卒業生の学位取得」(『北海道大学大学文書館年報』第10号、2015年3月、7・9頁)を参照。なお、時任一彦助教授は、1905年1月28日～11月6日以内は講師として授業を受け持った。
- 45) 「文武会」は遊戯会(体育系団体)と学芸会(文系団体)が1901年9月21日合併して創設された。
- 46) 「進級及卒業規程」(札幌農学校校則第35条～第47条)、前掲『札幌農学校一覧 自明治三十六年至明治三十七年』、25-27頁。
- 47) 「Absent-Mindness」は「Absent-Mindedness」の誤記か、不詳。
- 48) 「教官会議規程」(同校則第101条～第104条)、前掲『札幌農学校一覧 自明治三十六年至明治三十七年』、34-35頁。
- 49) 「校費生及特待生規程」(札幌農学校校則第48条～第58条)、「教官会議規程」(同校則第101条～第104条)、「予修科規程」(同校則第183条)、前掲『札幌農学校一覧 自明治三十六年至明治三十七年』、27-28・34-35・46頁。
- 50) 「札幌農学校成績資料」(北海道大学大学文書館所蔵)を参照。
- 51) 任命書(田中義磨関係資料0518、0519)を参照。
- 52) 「六 津軽海峡開通々知ノ件」、札幌農学校「庶務ニ関スル書類/明治三十七年」(札幌農学校簿書0994)。
- 53) 前掲『<翻刻>札幌農学校第23期生川嶋一郎日記(1899～1904年)』、106頁。
- 54) 拙稿「札幌農学校第23期生川嶋一郎の学生生活——学業・ロシア文学・遠友夜学校」、『北海道大学大学文書館年報』第5号、2010年3月、19-20頁。
- 55) 「軍隊送迎規定並内規制定ノ件」、庶務課「校則其他規程類 新設並改正/三十六年以降」(札幌農学校簿書0981)。
- 56) 「一六 軍隊送迎規定並内規改定ノ件」、前掲「校則其他規程類 新設並改正/三十六年以降」。
- 57) 「三八 アイグルハートニ関スル件」、前掲「札幌農学校公文録第一冊 秘密書類 永久/明治三十九年」。人名は『日本キリスト教歴史大事典』(教文館、1988年)を参照。

【後記】本研究は、JSPS 科研費 JP21K0218701の助成を受けたものである。

(やまもと みほこ/北海道大学大学文書館員)